

双子構文の構造と意味(その3)

著者	村上 丘
雑誌名	Otsuma Review
巻	53
ページ	65-73
発行年	2020-10-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006894/



双子構文の構造と意味（その 3）

村 上 丘

2-1-2. タイプ iB

表題のタイプでは、＜定要素＞の位置に＜単項述語＞、＜変要素＞の位置に＜2 項述語＞が生起し、きわめて多くの事例がこのタイプに属する。

2-1-2-1. [safe A, safe B]

表題のタイプの具体例は、以下のとおりである。

- (1) a. Safe bind, safe find. (しっかり縛れば, きっと見つかる)
 b. Little sow, little mow. (蒔く量が少なければ収穫も少ない)

述語論理に従えば, (1a) は「x が y を用心深く縛れば, x は y を確実に見つける」, (1b) は「x が y を蒔く量が少なければ, x は y を刈り取る量は少ない」と翻案できる。(1) の＜意味構造＞は, 以下のように定式化される。

- (2) a. CONJ [(SAFE [BIND (x, y)]), (SAFE [FIND (x, y)])]
 b. CONJ [(LITTLE [SOW (x, y)]), (LITTLE [MOW (x, y)])]

(1) は, 頭韻と脚韻の両方が踏まれた, 技巧的双子構文である。

2-1-2-2. [still A, still B]

次の事例も, このタイプに属すると思われる。

- (3) a. The more you have, the more you desire.
 b. Sill achieving, still pursuing. (LOD)

[the A-er the B-er] では, the と形態素 (-er) が協働し＜定要素＞を構成する。The-er は＜単項述語＞で, それに従える＜命題＞の程度の上昇を表す。CONJ は前半と後半の＜命題＞の相関関係を表し, 「～に应じ～である」の意味を表す。＜述語論理＞に従えば, (3a) は「x が y を所有する量が多ければ, y を願望する程度も増大する」, (3b) は, 「x は y を達成しても, なお一層 y を追い求める」と表現できる。両者の＜意味構造＞は, 次のように規定することができる。

- (4) a. CONJ [(THE-ER [HAVE (you, y)]), (THE-ER [DESIRE (you, y)])]
 b. CONJ [(STILL [ACHIEVING (x, y)]), (STILL [PURSUING (x, y)])]

(4a) では<項>の一つ (you) が<表層構造>に具現しているが, (4b) では, いかなる<項>も<表層構造>に具現していない。

2-1-3. タイプ iD

表題のタイプでは, <主要素>と<変要素>の位置に<単項述語>が生起する。

2-1-3-1. [the A-er, the B-er]

表題の形式は, 以下の例が対応する。

(5) The sooner, the better. (早ければ早いほど良い)

この事例は, 前項で言及した構文 (3a) に類似する。<述語論理>に従うと, (5) は「x が早いという事態の程度が上がれば, x が良いという事態の程度も上がる」と表現でき, その<意味構造>は次のように表示できる。

(6) CONJ [(THE-ER [SOON (x)]), (THE-ER [GOOD (x)])]

このタイプは, 以下のように, 極めて多くの<変異形>を有する。

(7) a. The more, the merrier. (大勢になるほど陽気になる)

b. The longer, the worse. (時が経つほど悪くなる)

c. The deeper, the sweeter. (深ければ深いほど甘い)

2-1-3-2. [the more A, the more B]

表題のタイプは, 前項の類例である。

(8) a. The more noble, the more humble. (偉い人ほど高ぶらない)

b. The more careless, the more modish. (気取らないほど格好いい)

これらの<変要素>は, more の添加によって迂言的比較級を形成する形容詞である。(8a) の<意味構造>は, 以下のように規定することができる。

(9) CONJ [(THE-ER [NOBLE (x)]), (THE-ER [HUMBLE (x)])]

2-2. 混交型

この章においては, 混交型の<双子構文>を考察する。混交型は, <項>と<述語>が表層に具現した形式である。<項>の部分进行他の語彙に変換すれば, 新たな<変異形>が生ずる。混交型は, 排他型よりも<変異形>を生じやすいと考えられる。なぜならば, この形式は, 多様な名詞が<項>の位置に生起するのを許容するからである。

2-2-1. タイプ iC

表題のタイプでは, <定要素>の位置に<単項述語>, <変要素>の位置に<項>が生起する。

2-2-1-1. [no A, no B]

夥しい事例が、表題のタイプに属する。次の資料を観察しよう。

(10) a. No pain, no gain. (苦勞をしないと利益は得られない)

b. No root, no fruit. (根がなければ果実はならない)

<述語論理>に従えば, (10a) は「もし x (=苦勞) がないならば, y (=利益) もない」と表現できる。その<意味構造>は, 以下のように表示できる。

(11) CONJ ([NO (pain)], [NO (gain)])

このタイプは, 以下のように, 多彩な<変異形>を有する。

(12) a. No mill, no meal. (碾臼がなければ粉は得られない)

b. No pipe, no pudding. (笛を吹かなければプディングは貰えない)

c. No song, no supper. (歌を歌わなければ夕食にありつけない)

d. No cross, no crown. (十字架を背負わないと栄冠は得られない)

いずれも, <変要素>同士の関係は密接である。たとえば, (10b) の root/fruit は脚韻を踏み, plant の共通下位語である。一方, (12a) の mill/meal は頭韻を踏み, 意味的に隣接的な関係にある。双子構文は2つの節から構成されるので, このような修辭的技巧を演出する格好の場である。

2-2-1-2. [many A, many B]

表題のタイプの具体例は, 以下のとおりである。

(13) Many women, many words. (女が多ければ言葉は多い)

(13) は「もし x (=女) が多いならば, y (=言葉) も多い」と表現できる。この<意味構造>は, 次のように規定される。

(14) CONJ ([MANY (x)], [MANY (y)])

(14) における x と y との関係に着目しよう。y は x から生産されたものを表す。したがって, CONJ は, 単に2つの命題の条件・結果だけでなく, 生産者と生産物との関係をも表す。many women make many words という形式も存在することが, この関係を裏付ける。この<格言>も, <変異形>が多い。

(15) a. Many lords, many laws. (多くの君主に多くの法律)

b. Many dishes, many diseases. (大食は多病の元)

c. Many seams, many beans. (畝が多ければ収穫が多い)

前項と同じく, この構造の<変要素>同士には修辭的技巧が凝らされている。

(13) と (15a,15b) は頭韻を踏み, (15c) は類音の特徴を有する。

2-2-1-3. [much A, much B]

前項で観察した many は、複数可算名詞の＜変要素＞を伴う。一方、この項での much は、不可算名詞の＜変要素＞を伴う。

(16) a. Much coin, much care. (金が多ければ気苦労も多い)

b. Much science, much sorrow. (学識が多いと悲しみも大きい)

＜述語論理＞に依拠すると、(16) は「もし x が多いならば、y も多い」と表現できる。両者の＜意味構造＞は、次のように規定される。

(17) CONJ ([MUCH (x)], [MUCH (y)])

前項と等しく、(16) においては、頭韻が踏まれている。

2-2-1-4. [such A, such B]

表題の形式は、「そのような A が存在する以上、そのような B が存在するのは必然である」という意味を担う。この形式も、多様な＜変異形＞を有する。以下の例は、先行節と後続節の＜変要素＞が人間の場合である。

(18) a. Such (a) father, such (a) son. (この親にしてこの子あり)

b. Such captain, such retinue. (この隊長にしてこの従者あり)

＜変要素＞の位置に、人間以外の名詞が来る場合もある。さらに、可算名詞の＜定要素＞に不定冠詞が付く場合と付かない場合がある。

(19) a. Such a life, such a death. (死にざまは生き方に相応する)

b. Such (a) welcome, such (a) farewell. (送別は歓迎に相応する)

c. Such (a) beginning, such (an) end. (始めが始めなら終わりも終わり)

これらは、一様に、次のように定式化できる。

(20) CONJ ([SUCH (x)], [SUCH (y)])

(18, 19) は、2 つの＜変要素＞が意味の面で修辭的である。それらは因果関係だけでなく、反義関係を結んでいる。

2-2-1-5. [another A, another B]

表題のタイプに属する表現は膨大にある。(21) は単数名詞、(22) は複数名詞が＜変要素＞の位置に生起する事例である。

(21) a. Another day, another dollar. (日数が増えれば収入も増える)

b. A great city, a great solitude. (大都市は大いなる寂寥である)

c. Good hand, good hire. (良い腕に良い給料)

(22) a. Other times, other manners. (時代が違えば風習も違う)

b. New lords, new laws. (領主が変わると法律も変わる)

- c. So many countries, so many customs. (所変われば品変わる)

これらの＜意味構造＞は、(21c) に代表させよう。

(23) CONJ ([GOOD (hand)], [GOOD (hire)])

2-2-1-6. [the more A, the more B]

表題のタイプに属するのは、以下の事例である。

- (24) a. The more danger, the more honour. (危険が大きければ名誉も大きい)

- b. The more laws, the more offenders. (法令が多ければ犯罪者も多い)

これは、2-1-3-1 と極めて類似する。前項では、＜命題＞内の＜項＞が暗示的であったが、上の例においては明示的である。＜述語論理＞に従うと、(24b) は、「もし x (=法律) が多ければ、y (=犯罪者) はより多い」と表記できる。その＜意味構造＞は次のように表示できる。

(25) CONJ [(TH-ER [MANY (laws)]), (TH-ER [MANY (offenders)])]

＜定要素＞が the more 以外の事例は、以下のとおりである。

- (26) a. The better (the) day, the better (the) deed. (もっと良い日にはもっと良いことをしたことになる)

- b. The fewer his years, the fewer his tears. (若者であるほど流す涙は少ない)

2-2-1-7. [often to A, often to B]

次の資料は、これまでの事例と比較すると形式的に複雑であり、＜定要素＞が副詞、＜変要素＞が前置詞句で表現されている。

- (27) Often to the water, often to the tatter. (何度も洗うとほつれる)

＜述語論理＞に従えば、「x が y (=水) に行く頻度が多ければ、x は z (=ぼろ切れ) になる頻度が増大する」と表現できる。この＜意味構造＞は、次のように定式化できる。

(28) CONJ ([OFTEN [GO (x to water)]], [OFTEN [GO (x to tatter)])]

2-2 節における種々の構文の＜意味構造＞を振り返ると、＜変要素＞の位置に＜項＞のみが現れた。一方、(27) においては抽象的述語 GO を含む＜命題＞が生起し、＜項＞の前に＜着点＞を表す標識 to が設定されている。

2-2-2. タイプ iF

表題のタイプでは、＜定要素＞の位置に＜2 項述語＞、＜変要素＞の位置に＜項＞が生起する。

2-2-2-1. [past A, past B]

PAST は, winter is past の場合, 「～が過ぎる」を意味する<単項述語>として機能する。一方, my house is just past the post office の場合, 「～が(時間的・空間的・能力的に)～を超える」を意味する<2項述語>である。これら2種類の past が関与する<格言>が, 以下の事例である。

(29) a. Past cure, past care. (薬がないなら気苦労も無用)

b. Past shame, past grace. (恥がなければ品もなくなる)

<述語論理>に従えば, (29a) は「もし x (=薬) が過ぎ去れば, y (=苦労) も過ぎる」, (29b) は「もし x (=人) が y (=恥) を過ぎるなら, x は z (=品) も過ぎる」と翻案できる。この<意味構造>は, 以下のように定式化できる。

(30) a. CONJ ([PAST (cure)], [PAST (care)])

b. CONJ ([PAST (x, shame)], [PAST (x, grace)])

2-2-2-2. [over A, over B]

Over は, she is excited/ she is overexcited において, <命題>を<項>にとる<単項述語>として機能し, 形容詞の「過剰」を表す。一方, my house is just over the hill において<2項述語>として機能し, 「～が～の向こう側にある」を意味する。以下の例では, <定要素>の位置にこれら2種類の over が生起する。

(31) a. Over shoes, over boots. (短靴が濡れたら長靴が没するまで)

b. Over fast, over loose. (あまりきつく縛ると緩みすぎる)

<述語論理>に従うと, (31a) は「もし x (=水) が y (=短靴の高さ) を超えれば, x は z (=長靴の高さ) も超える」と表現できる。日本のことわざ「毒を食らわば皿まで」に対応する。一方, (31b) は「もし x (=紐) が y (=x がきつい事態) を超えれば, x は z (=x がゆるい事態) を超える」と表現できる。(31b) の<変要素> (fast/loose) は反義関係で, y に比べ z は望ましくない事態である。(31) の<意味構造>は, それぞれ, 次のように規定できる。

(32) a. CONJ ([OVER (x, shoes)], [OVER (x, boots)])

b. CONJ ([OVER ([FAST (x)]), [OVER ([LOOSE (x)])])

(32) は, 共に over が関与するものの, 内部構造が異なる。(32a) の shoes/boots は<項>であるが, (32b) の fast/loose は<命題>の中の<述語>である。Over は, past と同様, 多義語であると考えられる。

2-2-2-3. [out of A, out of B]

表題のタイプに属する構文は形式的に多種多様で, (33) の事例が該当する。具体的に言えば, (33a, b) では [形容詞+前置詞], (33c, d) では [群前置詞], (33e) では [名詞+前置詞] として表現されている。

- (33) a. Far from city, far from health. (都市から離れれば健康維持は難しい)
 b. Full of courtesy, full of craft. (馬鹿丁寧に企みが多い)
 c. Out of sight, out of mind. (去る者日々に疎し)
 d. In for a penny, in for a pound. (乗り掛かった舟)
 e. Want of money, want of comfort. (金がないと楽しみもない)

<述語論理>では, (33a) は「x は y から離れれば, z から離れる」, (33b) は「x は y で満たされれば, z でも満たされる」, (33c) は「x は y が欠ければ, z も欠ける」, (33d) は「x は y を投資するなら, z まで投資しなければならない」, (33e) は「x は y が欠如すれば, z も欠如する」と表現できる。それぞれの<意味構造>は, 以下のように定式化される。

- (34) a. CONJ ([*FAR* (x, *from* city)], [*FAR* (x, *from* health)])
 b. CONJ ([*FULL* (x, *of* courtesy)], [*FULL* (x, *of* craft)])
 c. CONJ ([*OUT* (x, *of* sight)], [*OUT* (x, *of* mind)])
 d. CONJ ([*IN* (x, *for* penny)], [*IN* (x, *for* pound)])
 e. CONJ ([*WANT* (x, *of* money)], [*WANT* (x, *of* comfort)])

上記の<意味構造>においては, いずれも x に該当する<項>が<表層構造>に具現しない。

2-2-3. タイプ iG

表題のタイプでは, <主要素>の位置に<項>, <変要素>の位置に場所を表す<格表示>が生起する。

2-2-3-1. [garbage in, garbage out]

これまで観察した<格言>の語順は, no pain, no gain のように, <主要素>の位置に<述語>, <変要素>の位置に<項>が生起した。しかし, 表題のタイプでは, <主要素>の位置に<項>, <変要素>の位置に<格表示>が生起している。これは新しい表現形式の<格言>で, 類例は少ない。

- (35) a. Garbage in, garbage out. (ガラクタを入れるとガラクタが出てくる)
 b. Rubbish in, rubbish out. (同前)

(35) は, 「誤ったデータを入れると, 誤ったデータが出る」という意味であ

る。ここで使われる in/out は、反義関係を示す不変変化詞である。＜述語論理＞に従えば、2つの定式化が想定される。①「もし x (=人) が y (=ガラクタ) を z (=パソコン) に入れたなら、x は y を z から得る」と解釈した場合、＜3項述語＞PUT/GET を指定する。②「もし x (=ガラクタ) が y (=パソコン) に入るなら、x が y から出てくる」と解釈した場合、＜2項述語＞GO/COME を指定する。両者は、以下の＜意味構造＞として記述することができる。in/out of は、それが付加した＜項＞が＜着点＞＜起点＞であることを示す記号である。

- (36) a. CONJ ([PUT (x, *garbage*, *in* z), [GET (x, *garbage*, *out* of z)])
 b. CONJ ([GO (*garbage*, *in* y)], [COME (*garbage*, *out* of y)])

2-2-4. タイプ iH

表題のタイプにおいては、＜定要素＞の位置に＜項＞、＜変要素＞の位置に＜2項述語＞が生ずる。

2-2-4-1. [nothing A, nothing B]

表題のタイプでは、＜定要素＞の位置に nothing, ＜変要素＞の位置に＜2項述語＞が生起し、＜定要素＞は＜述語＞の＜項＞の役割を演ずる。以下の例は、共に、日本のことわざ「虎穴に入らずんば、虎児を得ず」に当たる。

- (37) a. Nothing venture, nothing have (or win or gain). (何の危険も侵さなければ、何も得ることはできない)

- b. Nothing seek, nothing find. (何も探さなければ、何も得られない)

＜述語論理＞に従えば、(37a) は「もし x がどんな危険も侵さなければ、x は何も得ることができない」、(37b) は「もし x が何も探さなければ、x は何も得ることができない」と表現できる。それぞれの＜意味構造＞は、次のように規定することができる。

- (38) a. CONJ ([*VENTURE* (x, *nothing*)], [*HAVE* (x, *nothing*)])
 b. CONJ ([*SEEK* (x, *nothing*)], [*FIND* (x, *nothing*)])

(37) の＜変要素＞(venture/have/win/gain/seek/find) は、すべて他動詞である。この場合、x (非特定の人物) は他動詞の主語に相応し、nothing は他動詞の目的語に相応する。

2-2-4-2. [harm A, harm B]

表題の形式は、次の事例が対応する。共に、日本のことわざ「人を呪わば、穴二つ」に対応する。

(39) a. Harm watch, harm catch. (禍に目を向けると禍に遭う)

b. Harm set, harm get. (禍を仕掛けると禍に遭う)

<述語論理>に従えば, (39a) は「もし x (=不特定の人間) が y (=災禍) を凝視すれば, x は y に遭遇する」, (39b) は「もし x が y を企めば, x は y を被る」と表現できる。それぞれの<意味構造>は, 以下のように表示できる。

(40) a. CONJ ([WATCH (x , harm)] , [CATCH (x , harm)])

b. CONJ ([SET (x , harm)] , [GET (x , harm)])

これまで考察した双子構文では, おしなべて, <意味構造>の語順は<表層構造>の語順に対応した。しかし, 2-2-4-1. および 2-2-4-2 で示した構文では, <意味構造>の語順は<表層構造>の語順と対応しない。この点については, この論文の続編で考察する。